

11章の冒頭には、3人の登場人物が出てきます。ラザロとマルタとマリアです。この3人は兄弟でした。2節によると、マリアは、主イエスに香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐったマリアで、そのマリアの兄弟ラザロが病氣だったのです。

面白いのは、ベタニアで主イエスに香油を塗った出来事は、次の12章に出てきます。時系列で言えば、まだ主イエスの足に香油を塗ってはいないのですが、紀元後90年代に書かれたのがヨハネ福音書なので、このベタニアの出来事は辞表に有名で、ヨハネ福音書の作者も知っていたのでしよう。

3節によると、マルタとマリアが人をイエスのもとに送って、『主よ、あなたの愛しておられる者が病氣なのです』と言われたのです。マリアは主イエスと親密な関係にあると思っていることは明らかです。イエスはこれを聞いて『この病氣は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。』と答えたのでした。マリアの伝言に対する主イエスの返答は全くかみ合っていないように思えます。この病氣は死で終わるものではない。神の栄光のためである、とあります。主イエスは、誰が病氣であるのかわからない状況ですし、マリアの兄弟であるラザロが病氣であることもわからない状況で、病氣が悪くなって死ぬことが起こったとしても、その病氣は死で終わるものではない、と言った主イエスの真意はどこにあるのか。病氣でたとえ死んだとしても、神との関係性が途絶えるわけではないということを書いていたのでしよう。

私たちキリスト者の信仰では、神との関係性は、自分が死んだとしても、神との関係性が途絶えることがないからです。そのことが神のよって復活させられるということなのです。死によって、人間はこの世での生活とは切り離されるのですが、神との関係性は死によって切り離されることはないというのが、キリスト教信仰です。主イエス十字架によって殺されるのですが、復活することによって死が神との関係を終わらせるものではないことを教えてくれました。聖書では、主イエスの復活は必ず受動態で表されています。この表現は、神の力によって復活させられたということを表しているので、神の子である主イエスも神の力によって復活させられたことを表しています。

ですから、病氣は死で終わるものではない、と言った後に、主イエスは、死んだとしても神との関係性が途絶えることはないという意味で、神の栄光が現れるためであると言ったのです。

4節後半で、「神の子がそれによって栄光を受けるのである」と言ったのは。神の栄光は神の力によって人は復活させられることを言っているのです。その理由が5節で『イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた』と述べることで、神との関係性が途絶えることはないということを示しているのです。具体的には、それは復活させられることが神の栄光を表すことであるということが、信仰者に対する神の愛によるものであることが示されているのです。神の愛が、マリアの身近な人にも注がれているがゆえに、たとえ死を迎えたとしても、神の力によって復活させられることが言い表されているのです。

私たちは、17節以下で、主イエスが愛しておられた人物がマリアの兄弟であるラザロだということを知ることになるのですが、1節から16節までの箇所では、マリアの近い人物であることしかわかりません。主イエスもそれ以上のことはわかっているはずが、神の愛が注がれた者は後絵死んだとしても神の愛の力によって復活させられること、神との関係性が切り離されることはないことを言っているのです。

ですから、主イエスは、ラザロが病氣だと聞いても、なお二日間同じ場所に滞在されていたのです。そして、2日後に、『もう一度、ユダヤへ行こう』（7節）と言って、ユダヤ人たちに殺される危険性を心配する弟子たちの反対を制して、ラザロの許へ赴くのです。

そして主イエスはラザロがただ眠っているのではなく、私は起こしに行くだけだと言うのを弟子たちは聞いたので、弟子たちは眠っているならば、病氣であっても助かるだろうと考えるのですが、すでに主イエスはラザロが既に死んだことを察していたのです。

そこで、主イエスははっきりと、『ラザロは死んだのだ。わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである』と言って、ラザロの死に弟子たちが直面してしまったり、弟子たちがその死によって神との関係性も途絶えてしまおうと早合点してしまっただろうことを言うのです。けれども、逆に、そのような厳粛な死の事実を前にして、主イエスはラザロと神との関係性が途絶えることはないことを示す良い機会が与えられることまで、ここで言っているのです。

けれども、トマスは何を早合点したのか、『わたしたちも行って、一緒に死のうではないか』（16節）と言うのです。この一緒に死のうではないかという言葉の意味が、イエスと共に十字架上で死ぬことを指して言ったのか、それとも、ユダヤ人たちによってイエスが殺される危険性の運命を共にしようという意味で言ったのか、はっきりしませんが、少なくとも、神の愛の力によって復活させられることを理解して発言したようには思えません。

私たちは、この世で生きていく際に、大きな事を成し遂げたいと考えて、神に力を与えてほしいと願うところがあります。別に大きな仕事を成し遂げたいという野望のようなことではないにしても、自分がやり遂げたいと思うことがある者です。けれども、そういうことを神に求めたとしても、慎み深く事態を冷静に受け止めることができるようにと、かえって弱さを授かるような経験をします。病氣になれば、謙譲を与えてくださいとお祈りします。けれども、本当の弱さを知るようにと、病弱のままであることを示されたりします。幸せになろうと願っても、逆に賢明であるようにと、貧しくあることを示されたりするので。確かに、そのような人生は理不尽なものです。けれども、主イエスがラザロにあって、実際に生き返らせる前から、私たち信者に、神の愛によって、たとえ死んだとしても、神の愛から切り離されることはないのだと言ってくださっている、この恵みの言葉をしっかりと受け止め直したいと思えます。

そこには、主イエスの復活に連なる形で、最終的には神の力によって私たちの復活が約束されているからです。